

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

直接的に目に入ってくる「活字」に気をとられてよくわからないことが多いのですが、本を読むことの本質とは、じつは筆者との「対話」にあるのです。

教育学者の齋藤孝さいとうたかしさんがいろいろなところで述べていますが、読書で何がすばらしいかというところ、(一)極端きょくたんな話、源氏物語や、万葉集でも①へイケ物語でも何でもいいのですが、②千年以上前の人間、しかも歴史を代表する知性や感性を持った大人物とだつて対話ができるということなのです。あるいは③ドストエフスキーや④トルストイを読むことは、時代が百年以上違う、(二)外国の、直接には決してコミュニケーションをとることがまったく不可能な天才たちと対話をしているということです。

目で活字を追いながらも、筆者の音が聞こえてくる感じがつかめることが、本を読めばいつでもというわけにはいきませんが、確かにあります。

そのことを本当に実感したことがあります。

私は⑤ゲオルク・ジンメルという約百年前ドイツで活躍かつやくした社会学者の⑥ケンキユウを⑦センモンにしている、数年前に『ジンメル・つなりの哲学』(NHKブックス)という本を書きました。その作業中、まさに百年前にドイツで生きたジンメルという人間と、「どうなの？これどうなの？」という会話をしている実感があつたのです。たしかにそこまでのめり込むにはさうとうな集中力を要します。(三)、真剣しんけんにある程度耳を傾かたむけようとすれば、(四)いま・ここにはいない筆者と、いつのまにか直接対話しているような感覚を味わえることもあるのです。

みなさんでしたら、大好きな小説家、⑧シンジ、歴史上の人物でもいいでしょう。本の世界に没頭ぼつとうしていくと、文字を通して、書き手や登場人物の⑨肉声にくこゑがなんとなく聞こえてくるような感覚、コミュニケーションがだんだん双方向そうほうきゆうになっていく感覚が生じてくることがあるのです。

もちろん本を読めばいつでも、というわけにはいきません。でも、私が『つなりの哲学』を書いていたときは、「ジンメルだったら今の日本をどういうふうに見るんだろうな」というようなことを、ずっと考えながら執筆しつぱんしていたので、なんとなく彼がいつのまにか今の時代にタイムスリップしてきて、今の日本を見ながら私に語りかけてくれているような気分になっていました。

② コミュニケーションの本質って、じつはこういうところにあるんじゃないかと思えます。

③ 具体的な人との関係でも、漫然と言葉を交わしているだけではだめなのです。

ちよつと心地よくなると、すぐその場を放棄できてしまう言葉がいくつも準備されていて、自分の感覚的なノリとかリズムとか、そういうものの心地よさだけで親しさを確認していると、やはり関係は本当の意味で深まっていきません。料理でいうと「苦み」のない、ただ甘いだけの料理を求めてしまう感じですね。

ノリとリズムだけの親しさには、深みも味わいありません。そればかりか、友だちは多いのに寂しいとか、いつ裏切られるかわからないとか、ノリがちよつと合わなくなってきたらもうダメだとか、そういう希薄な不安定な関係しか構築できなくなるのではないかと思えます。

④ 読書のよさは、一つには今ここにいない人と対話して、情緒の深度を深めていけること。しかも二つ目として、くり返し読み直したりすることによって自分が納得するまで時間をかけ理解を深めることができること（実際の会話では「えっ、今なんて言ったの。もう一度言ってみて」、なんて何度も聞き直すことはできませんものね）。あと三つ目としては、多くの本を読むということは、いろんな人が語ってくれるわけですから、小説にしても評論にしても、「あ、こんな考え方がある」「ナルホド、そういう感じ方があるのか」という発見を自分の中に取り込めるということ。実際のつき合いではそんなにいろいろなキャラクターの人とコミュニケーションすると「人疲れ」することがありますよね。でも本を読む上では作者でも登場人物でも、いろいろな性格の人と比較的に対話することができます。その結果、少しずつ自分の感じ方や考え方を作り変えていくことができるわけです。そういう体験を少しずつ積み重ねることは、多少シンドイ面もありますが、慣れてくると、じつはとても楽しい作業になるのです。

こうしたことに関係があるキーワードとして、「楽（ラク）」と「楽しい」という二つの言葉を対比させて考えることができます。「楽（ラク）」も、「楽しい」も漢字は同じですよ。

⑤ この二つの意味するところは、一致する場合もあるけれど、でも必ずしもまったく重なるというわけではありません。

ラクして得られる楽しさはタカが知れていて、むしろ苦しいことを通して初めて得られる楽しさのほうが大きいことがよくあるのです。苦しさといっても、別に大げさなことである必要はありません。

私は青森県の弘前市に住んでいたことがあるのですが、弘前公園は桜が有名で、どうせなら一番きれいな桜を見たいなと思ったことがありました。でも夜は花見の宴会をやってゴタゴタしていて、昼は昼で人が多い。桜そのものの美しさと静かに向かい合いたいのにそれができな

い。いつそ思い切って早朝五時ごろに行こうと思いい立ちました。じつは私は夜型人間で早起きは人の苦手なのですが、その日だけはなんとか頑張って早起きをすることができました。眠い目をこすりながら公園に行ってみると、きれいな澄んだ空気と静寂の中に、*₄ソメイヨシノがふわっと咲いて浮かび上がる姿が、なんとも荘厳で美しいものでした。静かな雰囲気^{ふんいき}で本当に美しい桜を見てみようと思いい立ち、ラクをせずに早起きするというちょっとだけ苦しい思い（じつは私としては相当頑張ったのですが）をしてみると、「なるほどこういうすばらしい体験が待っているんだなあ」と、そのときつくづく思ったものです。

「ちよつと苦しい思いをしてみる」ことを通して、本当の楽しさ、生のあじわいを得るといふ経験はとても大切なんじゃないかと思うんです。ラクばかりして得られる楽しさにはどうも早く限界（飽き）^{あき}が来るような気がします。けれどちよつと無理して頑張ってみることで得られた楽しさは、その思いがとても長続きして、次に頑張る力を支えるエネルギーにもなります。かといって、ものすごく大変な苦しみばかりでは、疲れて嫌になってしまいますよね。どの程度の努力、どの程度の頑張りか、本当の楽しさをあじわうきっかけや力になるのかということをお人たちにアドバイスしたり、自分で手本となって示せることも、「大人」といわれる人びとのとても大切な社会的役割だと思っております。こうしたことは、人間関係にだってあてはまると考えられます。他者への恐れ^{おそ}の感覚や自分を表現することの恐れを多少乗り越えて、少々苦労して人とゴツゴツぶつかりあいながらも理解を深めていくことによって、⑥「この人と付き合えて本当によかったな」という思いを込めて、人とつながることができるようになると思っております。

（菅野仁『友だち幻想 人と人の（つながり）を考える』より）

*₁ドストエフスキー……ロシアの小説家（一八二一〜一八八二）

*₂トルストイ……ロシアの思想家、小説家（一八二八〜一九一〇）

*₃ゲオルク・ジンメル……ドイツの社会学者（一八五八〜一九一八） *₄ソメイヨシノ……桜の種類の一つ

問一 空欄①〜③に入る言葉として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア だから イ でも ウ あるいは エ しかも オ たとえば カ ところで

問二 傍線部④〜⑥について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問七 傍線部⑤について、「この二つの意味するところ」の違いを説明した次の文の空欄に入る内容を（A）は三十字以内、（B）は六十五字以内で答えなさい。

・（A）（ ）。（それに比べて）（B）（ ）。

問八 傍線部⑥『この人と付き合えて本当によかったな』という思いを込めて、人とつながることができるようになる』とあるが、あなたが人との関係を築いていく上で大切にしたいと思うことは何か。その理由も含めて百字以内で答えなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

うなずきながら、私はうれしかった。やはり*₁亨くんはとびきりの男の子だと確信できたし、そういった話を年下の私にきちんと説明してくれるところもよかった。

① 亨くんととびきりになりたい——空を飛ぶことと同じくらい、それは強く切ない願いになった。

けれど、彼とそんなふうにならに言葉をかわせたのも、私が小学校を卒業するまで。中学生になった私が、彼にたいする恋心を論理的(！)に自覚したあとは、もうだめだった。

偶然のコンビニの出会いには、相手が気づかぬうちに逃げだした。頭のなかで何千回もリハーサルしたにもかかわらず(店ではったり↓一緒にお菓子をかう↓公園で食べる、というささやかな設定だ)。通りのむこうから近づく笑顔には、ロボット歩きですれ違う。かろうじて返す笑みは、がちがちの硬度。②セイフクのシャツの下は、ナイアガラなみのひや汗。

亨くんは日ましに硬化する私の態度にはじめは驚き、かすかに傷ついて見えた(これは私の錯覚もある)。私の妄想のなかでは、亨くんは嘆き哀しみ、私への真の気持ちに気づくはずだった。むろんこれも想像どまり。

じつさいの亨くんは、じきにそつけない私の態度に慣れた。同時に、前のようにあかるく話しかけてくることも、*₂バンジョーを聞きにおいでと誘ってくれることもなくなった。といって、無視されるわけでもない。

つまり私は、ただの隣人の立場になりさがったのだ。もうそれは、完璧なほど。

私が自分の柵のなかをうろついている間に、彼はバイクの免許をとり、高校を卒業し、大学生になった。*₃ブルーグラスのサークルでバンジョーを弾き、アルバイトに通い、ときどき高級そうなバッグを腕にかけた女子大生と歩いている。大学生はいそがしい。

わかっている。そんな日々には、隣人からお誕生日状なんてどいたら、誰だっておどろくはず。ああ今、気づいた。カードは亨くんに見られたくないだけじゃない。あのさらさら髪かみの女子大生にのぞかれ、「可愛いお隣さんね」なんて、微笑ほほえまれたくないんだ。

ママがあたため直してくれた④ユウハンを食べながら、私はそんなことを黙々と考えていた。

今日の晩ごはんは、ひじきとじゃがいもを甘く煮たのと、ハンバーグのホワイトソースグラタン。パパの好物と、私が好きなものを組みあわせるせいで、わが家の食卓はいつも和風とも洋風ともつかないものになる。書道教室のある日は、私ひとりだけ夕食が遅くなるけれど、

ママはなにげなく私と一緒にテーブルにつく。パパはテレビの前のソファに陣取り、ときおり私たちの会話に口をはさむ。なごやかで平和な家族の日常風景。

「どうしたの、つばめ。今日はなんだかぼんやりしてない？」

箸がとまったままの私を、ママがのぞきこんで言う。

「そうかな？ 体育のバスケットにリキいれすぎちゃって、疲れたのかも」

「学校のあとにまた塾じゃ、きついんじゃない？ 疲れたときはやすんじゃえば？」

「そんなわけにやいかないよな。つばめから通わせてくれて言いだしただから」

パパが新聞から顔をあげ、こちらに顔をむけて笑った。

「あら、子どもにそんなこと義務めたく押しつけちゃかわいそうよ。自分で言い出したことは最後までまつとうすべきだなんて。大人だってむずかしいもの。ところでパパの早朝ジョギング宣言や、つばめの歴史の教科書をもう一度読み直すってあれ、どうなった？」

「う……まあ、それはそのうちな」

② パパは口ごもると、さっさと新聞に目を戻した。私とママは、おかしげに目くばせしあった。ママはやさしい。いつだって、私の（ ）（ ）をもつてくれる。

それって、私がママの实の子どもじゃないということとは、関係ないと思う。

ママは、家族はもちろん、道端の見知らぬひとや猫やバッタにだって思いやりと慈悲をしめす人間なのだ。パパも気弱なところはあられるけれど、根はやさしく、男のくせに涙もろい。私たちは、家族としてとてもうまくいっている。

③ だけど知っている。それは、私たちのひそやかな努力のたまものでもあるのだ。

おたがいを思いやり、平凡な家族の時間こそを、たいせつにすること。離婚して再婚する家庭なんて今はどこにでもあるのに。きまじめなパパと慎み深いママは、そのことに◎キオイを感じているふしがある。

私が見たい反抗期もなく育ってしまったのは、（ ）（ ）をとりあい楽しげにがんばるふたりが、なんだかかけなげで可愛かったからだ。親を可愛いと思うなんて少しへんだけど、守られたものをこわすのは私も得意じゃない。そんなとき、私は確かに、母親よりも父親の気質をうけついでいるのだと思う。

「平気。書道なんて体力つかうもんでもないしね。飽きたらやめるかもしれないけど、今のところは楽しいよ。学校の友だちには、ばばくさーって笑われるけどさ」

「ママはだめだわあ、筆ペンでさえ使うの苦手なのよね。けど、いまだきの子にしちやめずらしい趣味よねえ。④ 駅前の教室に通わせてくれて言ってきたときはびっくりしたもの」

「小学校のお習字の先生が面白かったからね。ちよつとやってみたかったんだ」

ママはへえ、と感心したようにうなずく。うそ。習字の時間は理科の次にきらいだった。パパは黙だまったままだ。スポーツ欄らんに熱中しているふり。

でも私は、気づいていた。

パパがひやひやしながら会話に耳をかたむけていること。とうに別れた（パパが捨てられた妻と同じ趣味をもつ娘むすめ。パパの話では、私を産んだ母親はけっこう名の知れたシヨカ（書家と書くことも、そんなしょくぎょうがあることもそれまで知らなかった）で、最近さいきんは水墨画家すいぼくとしても活躍かつやくしているのだそうだ。

母親の話をするとき、パパの頬ほおはわずかに④ コウチヨウする。ママには内緒だぞ。そう声をひそめるパパは、父親として、ちよつぱり下世話げせわなどがある。娘とひみつを共有する楽しみを、ひそかに味わいたいタイプなのだ。

書道への関心などまるでなかった時点で、両親にたのんで教室に通わせてもらうことにした。はじめは墨一色で何かを書くのは退屈に思えたし、墨をするだの筆の手入れだの準備もかったるいなあ、と気おくれた。それでも知りたかったのだ。

実の母親が夢中になったことが何なのか。もちろん書道や水墨画のせいで母親が私とパパを置いて家を出たわけじゃないのは、明白だ。彼女はほかのひとに「恋こいをした」から家を出た。そのこともパパのうちあけ話うちあけわたりできいている。うわきじゃなく恋だとパパは言った。

ママは、実母と同じ分野に娘が興味をしまったからといって、哀あなしむことはないはずだ。やっぱり血かしらねえ。そうまじめに感心したりするだろう。⑤ ママには自信があるのだ。

私を三歳さいから育てたという絶大な自信。ただ私が、母親への興味だけで書道をはじめたと知ったら、ちよつぱり傷つくかもしれない。だから私もパパも言いいだせないでいるのだ。

ママもパパも私を④ ソンチヨウしてくれている。他の友だちの親のように、必要以上のことをとやかく言いったりもしない。私もふたりが大

すきなのに、どうして長いあいだ一緒にいると居心地わるくなるんだろう。胸のあたりがもやもやうずいてくるんだろう。

家族のだんらん図が織られた*₄タペストリー。私たち家族は気づかい、いたわりあいながら、それを織っているように思える。爪をたてて、ほころばせたりしないよう気をつけて。ていねいに。

私はときどき、いっけん愉快なその共同作業に疲れてしまうのかもしれない。

興味本位ではじめた書道教室も今は、わりあい気に入ってる。というより、ほかに気に入るものなんてないのだ。あかるい蛍光灯に照らされたこの家も、友だちと109のギャル系ショップをハシゴしてからパフェを食べるのも、はしゃいで撮るプリクラも。どうってことない。

そこそこの人生のそこそこの上手な*₅モノクロ水墨画の一部みたい。そこそこって便利な言葉。そして、ちよつとさびしい。高校生や大学生になつたら、変わるのかな。

亨くんや顔も知らない母親のように、⑥自分だけのとびきりを見つけられるのかな。

食器を片付け終わると、宿題があるからと、早々に自分の部屋にひきあげた。

普段は、居間で家族だんらんにくわる時間は十時までときめている。娘としての義務はマツトウしなくちやならない。でも、ときおりこんなふう息苦しくなってしまうのだ。

(野中ともそ「宇宙でいちばんあかるい屋根」 14歳の本棚 青春小説傑作選 —家族兄弟編— 所収)より)

*₁亨くん……「私」の隣に住んでいる片思いの大学生

*₂バンジュー……アメリカで生まれた弦楽器

*₃ブルーグラス……電気を使わない楽器で構成されたアメリカ生まれの音楽

*₄タペストリー……壁掛けなどに使われる室内装飾用の織物 *₅モノクロ……単色、白黒

問一 傍線部②③について、それぞれ漢字に直して書きなさい。

問二 空欄ア・イに入る身体の一部を表す言葉として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 鼻 イ 手 ウ 口 エ 耳 オ 肩 カ 足

問三 傍線部①「亨くんのとびきりになりたい」とあるが、実際の自分を表している表現を本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部②「パパは口ごもると、さっさと新聞に目を戻した。」について、その理由を説明した次の文の空欄を埋めなさい。(A)は本文中から二十五字以内で抜き出し、(B)は十五字以内で答えなさい。

・娘には(A)ということを求めながら、(B)を指摘されてきまり悪かったから。

問五 傍線部③「だけど知っている」とあるが、どのようなことを知っているのか。五十字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「駅前の教室に通わせてくれて言ってきた」とあるが、「私」が書道教室に通い始めた本当の理由は何か。二十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部⑤「ママには自信があるのだ。」とあるが、それはママのどのような様子を表したものか。六十字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑥「自分だけのとびきりを見つけられるのかな」とあるが、そのように思う「私」の気持ちとして最も適切なもの次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親を安心させるために好きでもない塾に通ったり、家族だんらんのために無理して時間を共有したりすることに飽きているため、早く親から自立して自分だけの世界を探し求めようと思っている。

イ 幼い頃、自分から離れていってしまった実母が取り組んでいた書道の魅力みりよくを自分もまた追い求め、まだ見ぬ秘められた自分だけの世界を探し求めようとしている。

ウ たがいを必要以上に気づかい、いたわり合いながら家族という絆きずなをつくりあげていることに疲れてしまい、そのしがらみから解放してくれる自分だけの世界を探し求めようとしている。

エ 中学生であるために、友だちとパフェを食べたり、プリクラを撮ったりすることに気がつかっている今の状態を脱して、早く高校生や大学生になり自分だけの世界を探し求めようと思っている。

受験番号

名前

一																
問八	問七						問六	問五			問三	問二	問一			
	B			A			を	、	い	(2)		(1)	ウ	④	② 平家	I オ
	に	長	得	ち	、	ラ	作	そ	ろ	か	、	人	自	問四	⑤	II エ
	も	続	ら	よ	早	ク	り	の	い	ら	希	と	分			
	な	き	れ	つ	く	し	変	結	ろ	。	薄	の	の	エ	⑤	III イ
	る	し	る	と	限	て	え	果	な		な	関	感			
											不	係	覚			
											安	の	く			③×3
											定	深	認			
											な	み	し			
											関	や	て			
											係	味	い			
											し	わ	る			
											か	い	④			
											構	が				
											築	な				
											で	い				
											き	だ				
											な	け				
											く	で				
											な	な				
											る	く				

二													
問八	問七			問六	問五			問四		問二	問一		
ウ	と	と	娘	と	実	も	が	家	B	A	I オ	② 制服	
	い	え	を	。	の	の	い	族	自	べ	自		
⑧	っ	娘	三		母	で	を	と	分	き	分	II イ	
	て	が	歳		親	あ	思	し	自	だ	で		
	哀	実	か		が	る	い	て	身		言	問三	
	し	母	ら	⑥	夢	こ	や	と	が		い	た	
	む	と	育		中	と	る	て	で	⑤	だ	だ	
	こ	同	て		に	。	と	も	き		し	の	
	と	じ	て		な		い	う	て		た	隣	
	は	書	き		っ		う	ま	い		こ	人	
	な	道	た		た	⑨	ひ	く	な		と	問二④×2	
	い	に	自		こ		そ	い	い		は	問三⑤	
	様	興	信		と		や	っ	こ		最	① 紅潮	
	子	味	が		は		か	て	と		後		
	。	を	あ		何		な	い			ま		
		示	る		か		努	る			で		
		し	の		を		力	の	⑤		ま		
		た	で		知		の	は			っ		
		か	、		る		た	、			と		
		ら	た		こ		ま	た			う		
											す		

⑨

⑧

①×5

① 詩人

③ 専門

⑥ 研究

③×3

①×5

② 平家

I オ

II エ

III イ

①×5

② にくせい